



夜の領域全てを尽くして、神様は人々を見ている。
その眼差しが暖かなものなのか、冷やかなものなのか、人間は知る術をもたない。
ただ、じっと物言わぬ瞳が空中からこちらを見ている。

足りない。

何度数えてみても、数が合わない。

念入りにばらばらにした部品がなくなっている。

男は額に浮かんだ冷や汗を血まみれの右腕で拭う。ひどく抵抗されて、噛みつかれたので右腕は『彼女』の歯型だらけになっていた。

神社の境内で見かけた時は、まさかここまで獣じみた抵抗をするような女には見えなかったのに。男は内心、舌打ちした。

部品は見つからないが、彼女の抵抗が凄まじかったのでどこかへ飛んでいってしまったのだろう。

見つからないなら明日、神社に火をつけて何もかも燃やしてしまえば証拠はなくなる。

そろそろ帰宅する時刻になった男は急いで神社を後にした。

「おかえりなさい、あなた」

妻の美代子が笑顔で玄関を開けてくれた。自宅でも化粧を欠かさない顔には、お嬢様特有の高飛車な雰囲気が出ている。自慢のスタイルを強調するようなぴったりの服装には苦笑せざるを得ない。

「ねえ、どうだったの？あの神社の娘、立ち退きするつもりになったの？」

さっそく、金がらみの話になるところは父親そっくりだな、男はさらに苦笑を続けるしかない。上司の娘を貰ってやって早二年の月日が流れようとしているが、美代子は夫として自分を見ておらず、まだ父親の部下として見ているような気がして不愉快だった。

「ああ、了承したよ。あの村一帯を買い取って高速道路にする。近場に出来る予定のアミューズメントパークの完成に合わせてね」

美代子は手を打って喜んだ。今回のプロジェクトは全て男の指揮に置いて進んでいるので、成功すれ

ば昇進は間違いない。

逆に失敗すれば首が飛び、美代子に離婚を言い渡されるだろう。

「良かったわ、あの神社の娘ったらしつこいんだもの。ここは呪われた土地だから清め続けなければならぬとか、神社を壊したら神様の祟りだあるとか、散々脅してきたじゃない」

「あんな田舎に住んでいるから迷信深くなっているんだよ。現代には神様よりもお金の方が必要だ」

男の言葉に美代子は甲高い笑いをもらした。上品に笑っているつもりらしいが、男の耳には金属品を一度に倒してしまった音にしか聞こえない。

「ああ、これで陰気くさい村にも神社にも不気味な娘にも会わなくていいのね！嬉しいわ」

父親が会長を務める会社で、美代子は社長の椅子に座っている。男はその補佐だ。もともと、このプロジェクトが成功したら美代子は夫である男に社長の座を譲り、別に女性エステの会社を興すつもりだと常々話している。

野心溢れる男にとって、それは願ってもいない話だった。上司に取り入り、大して好みでもない女を嫁にしてまで社長になろうと働いてきたのだ。

男にとって貧乏は恐怖であり、倒すべき敵である。金を手に入れるためなら、平気で同期の連中を蹴落としてきた。金にならない付き合いはしないので、友だちと呼べる人間はいない。

男は金のために生まれ、金のために生きている。だからこそ、美代子の夫になるためにライバルたちを裏工作して失墜させた。男の計画通り、美代子は男の妻となった。

しかし、妻となった美代子が、父親が引退するなり社長になると言い出すとは、さすがの男も予想していなかったが。そのため、男が社長に就任する時期は大分遅れてしまった。

だが、チャンスは再び巡って来た。今度こそチャンスをものにするべく男は何の迷いもなく、土地の買い上げを行った。

時には合法すれすれの手使ったが、まるで良心は痛まなかった。どんなことだろうとも追い詰められる方が悪いのだ。

究極に追い詰められた状態といえる貧乏だって、弱いから金が無くなる。良心を捨て、己の利益だけ考えれば金持ちになれる、ただそれだけの話なのだ。

男は金のない生活など絶対に嫌だった。何が何でもプロジェクトを成功させて、自分の地位を確固たるものにしなければ安心は出来ない。

強引な手段を使って、尚男が最も買い取りにこずったのは、企業の工場跡地でもなく、富豪が所有する山でもなく、名前すら聞いたことのない辺鄙な場所にあるひなびた村だった。

彼らは村に昔から信仰されている『夜尽様』という神様を何かあるにつけ出してきては抵抗した。この土地は夜月様が眠っている土地だから荒らすと呪われる、神社が夜月様の力を封じているから誰も呪われずにすんでいる、オカルト紛いの話を散々されて男はうんざりした。

おかしい信仰を持った村相手に戦うのは、村人たちの集団意識が異常に強く、なかなか困難な作業であったが、誰しも肉体的な痛みには我慢の限界というものがある。

違法手段を辞さなくなっても、強固に立ち退きを反対したのは噂の夜尽神社の巫女だった。神主である父親を失ってから、ずっと一人で神社を守っていた彼女はいくら脅そうが、傷めつけられようが、絶対に首をふらなかつた。

その意志の強さは、男にとって目障りなだけであり、何とかして判子を押させようと嫌がらせを続けたのだが、彼女の強さは若い見た目を裏切るように老成していた。

そもそも神主のいない神社など存在理由がないではないか。男は正論を主張したつもりだったが、巫女を名乗る彼女は笑っただけで動じなかつた。

「神主はいなくても神様はおりますけん、あなたには見えないだけで。いつでも神様は見ておられますけんね、気をつけなされ」

土地の訛りがひどく嫌みな響きをもって、男の耳に響いた。口元を押さえて笑う彼女の顔は目元が上に引き攣り、邪悪な生き物にしか見えなかつた。

土地を出て行きたくないのは、こちらが提示する金額に納得がいていないからに違いない。苛立ちを隠しながら、男は檻樓の神社には破格とも思える値段を提示してやったが、彼女は決して首をふらない。

「あんたにはそのうち、罰が当たりよるね。私には分かるけん、あんたには悪人の匂いがぷんぷんするんよ。夜尽神様はふたつの眼で過去の罪を見破るけん、あんたの罪ももう見破られておる」

にたにた笑う醜い顔に、ついに男は我慢の限界を迎えた。こんな田舎に住んでいる、頭のおかしい女に馬鹿にされるのは、金と権力を持つ男にとってあり得ない事態だった。

気がついた時には彼女の頭を目がけて、近くにあった燭台を力一杯に殴りつけていた。

鈍い音がして、彼女の額から赤い液体が迸る。自分の血に興奮したのか、彼女は勢いよく立ちあがり絶叫した。

「いああああっ、この罰あたりがああああ！夜尽様に崇られろ、呪われろおお！」

目を剥きだし獣じみた咆哮を上げながら、血まみれの顔で迫って来る彼女に男は一瞬だけ恐怖を覚えた。

「神様なんかいるものか！この気違いめ！」

男はもう一度燭台を振り上げたが、まるで頭部だけの生き物になったように彼女が首だけを素早く動かして腕に噛みつき、獣のように歯をむき出して男の腕から離れようとせず、ひどい痛みに男は苦悶の声を上げた。

神社の中での争いだったので、声を上げたところで誰も気づかない。それどころか、男が村人たちをほとんど追い払っていたので近所には、もう人の気配すらなかった。

男は肉を引き裂かれる痛みをこらえて、燭台を左手に持ち替えると力いっぱい女の頭に振り降ろした。血しぶきが噴水のように飛び出て、男を頭からずぶ濡れにした。

生温かい血のぬくもりは懐かしかった。過去にも同じような経験をしたような覚えがあったが、男はすぐに心中で打ち消した。

噛みついた彼女の頭部を引き離すには左手で口を開いてやらないと無理だった。まるで野生の獣みたいがちりと、男の腕に喰いついている。女性とは思えない恐るべき力だ。

ずたずたにされた右腕を見て、男の中に沸々と怒りが湧いてきた。何故、自分ほどの男が地位も金も持たない狂った馬鹿な女に傷つけられなくてはならないのか。

後々死体を始末する時の効率と恨みをこめて、男は彼女の身体をばらばらにした。神社の横に建っている、神社と同じぐらい檻樓家が彼女の住処なのだが、包丁を勝手に持ち出して一日かけて持ち主の身体を切断した。

作業が終わり、立ち上がると彼女の頭部に異変があった。目玉がないのだ。黒い穴が見えているだけで眼球が入っていない。

男は慌てて周囲を探してみたが目玉はどこにもない。頭を叩き割った時に衝撃で飛び出したのだろうか？

痛む腕をこらえながら男は目玉を探したが、辺りが夕闇に包まれても見つからず、男は搜索を断念した。

明日、もう一度この神社に訪れて燃やしてしまえばいい。どうせ何もかも燃えてしまえば目玉がない事実にも気がつかれないだろう。

そう結論づけると、男は知り合いの医者腕を診てもらい、何食わぬ顔で帰宅した。

妻の美代子は夫の怪我にまるで興味を示さなかったので、好都合だった。

風呂場で腕の傷を見てみると、無残なほどに歯型が残っている。知り合いの医者が思わず目を逸らしそうになったのも納得出来た。忌々しい痛みに男はまた舌打ちをした。

苛立ちが身体を駆け巡ったが怒りをぶつけるべき憎い彼女は、もう死んだのだ。

これであの村の土地は全て会社のものになった。高速道路の工事を急がせれば何もかも予定通りに運ぶだろう。ついに社長の座まで上り詰めるのだ、興奮が口からもれてきて低い笑いになった。

すると、男の笑いに同調するかのように忍び笑いが背後からした。しわがれた老人のような声で、男は心臓を掴まれたみたいに全身を緊張させた。急いで振り返ってみたが、そこにはいつもの風呂場の光景が広がっているだけだった。

疲れている、当たり前だ。今日は人を殺したのだから。

男は自分に言い聞かせるように呟いた。人間を殺した、殺人罪を犯した、死刑になるほどの罪を犯したというのに男には、まるで後悔の念など湧いては来ない。

彼女が死んでも気がつく人間はいないだろう。唯一の身よりだった父親は死に、村人たちはもう散り散りになった。死体さえ燃やしてしまえば誰も彼女のことを思い出したりなどしないに決まっている。

男の罪が暴かれる心配はない。死んだことにさえ気づかれない人間を殺したところで、何の罪になるというのだ。法律や道徳など馬鹿馬鹿しい話だ。何の儲けにもならないものなど、この世界には必要ない。

男はベッドに倒れ込むようにして身体を休めた。さきほど聞いたしわがれた笑い声が耳にこびりついている。背後から聞こえたようで、己の内側から聞こえたような妙な声だった。

美代子とは寝室を別にしてしているので、たったひとりの空間がやけに広く感じられる。今まで一度も感じたことのない感覚に男は戸惑った。

寝返りを打つと背中に絡みつくような、粘着質な視線を覚えて男は身体を起こした。

しんと静まり返った空間には何もない。

気の迷いだ、殺人の影響で神経が高ぶっているのだ、男は深いため息を吐いて無理やりに眠りについた。

夢の中で、耳をつんざくような凄まじい音が聞こえた。熱い、何かが燃えている。誰かが叫んでいたが、男はその場から逃げようと必死だった。自分の足を掴んだ誰かを蹴り飛ばして、走る自分が見える。夢か現か分からないまま男は寝返りを打つ。

誰かが笑っている、炎の中で誰かが見ている。

次の日、男は自宅にあった灯油タンクを車に積み込んで神社のある村へ向かった。夕暮れ時を狙って向かったために、辺りはもう闇に包まれ始めている。暗がりに姿を隠すようにして、男は神社へ潜り込んだ。

死体は昨日と変わりなくばらばらのまま、放置されている。腐敗臭が鼻をついたが、急いで灯油をかけると、たちまちガソリンの匂いが狭い室内に充満した。

ご神体を安置していると思われる奥の方で、何かが光っているのが男の視界に入った。金目の調度品でもあるのかと男はそちらへ歩を進める。もし金目のものなら奪っていくつもりだ。金になるものは全て手に入れてから焼き払おう。

血の匂いがぷん、と臭う。

そろそろと歩みを進めていくうちに耐えがたいほどに血の香りが鼻についてくる。過去に、こんな風に血の匂いに塗れた覚えがある。

頭の中で余計な考えを打ち消そうとすればするほど、鮮明に映像が甦って来る。

頭の中身をぶちまけた醜い中年の女の姿と、腹の中身をぶちまけた年老いた男の姿が目の前に広がる。檻樓家の汚い居間で並んで倒れている。

脳裏に年老いた両親の姿が浮かんだ。貧乏でどうしようもないくらい、しみったれた家でろくな家具もなく電化製品は拾ってきたもので間に合わせていた。

雨が降れば雨漏りし、風が強く吹けば壁が壊れた。何もない家だった。いや、家ではなく小屋だった。あんな小さくて粗末な建物は家ではない。人が住む場所ではなかった。

男はそんな家がたまらなく嫌で、金が欲しくて、両親を殺して火をつけた。

警察は父親による無理心中として事件に片をつけて、男は両親の保険金を手に入れて今の地位まで這い上がった。

そうだ、生きている価値のない人間がこの世には確かにいる。

両親は生きている価値などなかった。だから。

背後でしわがれた笑い声がした。それは年老いた父親の声に似ていた。はっとして顔を上げると、光はもう目の前にあった。

ふたつの眼球が暗闇に浮かんだまま、男を見ている。

血走った眼球からは、いくつかの神経が垂れ下り、血が滴っていた。
闇の目が男を見つめている。

男の脳裏に母親の小さな目が浮かび、父親の枯れた笑い声がこだまして、最期には殺した巫女の邪悪な笑みが横切っていた。
闇から闇へと男の精神はにじみ出て行き、何もなくなった。

妻の美代子が警察に出した捜索願いにより、男は巫女の死体と一緒に夜尽神社で発見された。男の犯罪という秘密は暴かれたが、本人はすでに何も聞こえない世界へ行ってしまった。

発見された男は、両手に自分で抉り出したと思われる己の眼球を握っていた。
すぐに病院に収容されたが、いくら医師が治療を試みても男の精神が回復することは二度となかった。

<了>

嗤う夜の眼

<http://p.booklog.jp/book/28619>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：『戦場に猫』様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28619>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28619>